

詩想滴々

# 新時代の胎動

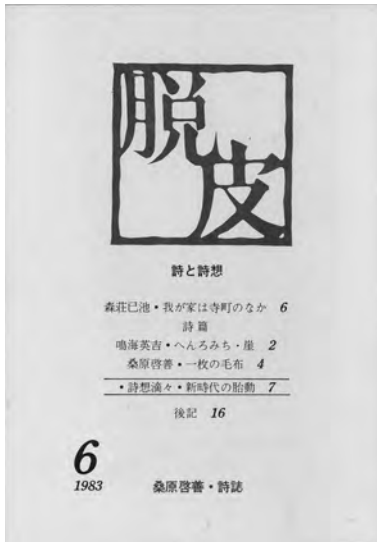
桑原啓善

本篇の初出は、桑原啓善の個人誌「脱皮」No.6（1983年5月18日発行）です。

この頃桑原は、一人で日本全国を巡り「不戦のための自作詩と講演の会」を行っていました。当時は、米ソ冷戦の核軍拡時代で世界中大きな反核のうねりが拡がっていました。しかし桑原は、反核ではなく、「不戦非武装」の平和運動を、たったひとりでやっています。この中で桑原は、人類文明を転換しようとした「革命家」宮沢賢治を発見していくのです。それは宮沢賢治が「自分と全く同じことを考えていた」先達の詩人であったことに気付いたからです。その深い運命的な賢治との出会いが本篇には確かに書き記されています。

そして本篇の初出「脱皮」No.6号には、奇しくも森荘巳池氏（賢治の年下の親友）の寄稿が掲載されています。桑原はこの寄稿の縁で、この後森荘巳池氏を盛岡に訪ね、賢治が革命家であったことの確証を得ます。この賢治との出会いを経て、桑原の生涯を賭けた大事業「テクノボー革命」への道はひかれていきます。（熊谷）

先日、オーストラリアから、平和を訴えるために、自転車ツアーの人達が来てるから、行かないかと誘われた。会場に集ったのは私と妻と知人と三人。オーストラリア人は若い二人の男女で、彼等はたった三人のために、一時間余も映画をやってくれ、あと対話の会をもってくれた。片言だが何か心の通じ合う会だった。君達は何が訴えたいのだと聞くと、disarmament（非武装）だと言った。私は一瞬それを疑った。反核・軍縮ではないのである。核は勿論、一片の武器も残さない。西欧人は伝統的に「力は正義」と考えるから、生きるための武器と戦争を否定しない。反核・軍縮が平和運動の基底



「脱皮」No.6

編集・発行人 桑原啓善  
(1983.5.18 発行)

である。だから私は驚いたのである。

恐らく、原始キリスト教的な信仰かもしれないと思つて、君はクリスチャンかと聞くと、いや、以前はそうだったと言つた。いまは教会が墮落して、企業などの援助に依存し、牧師は平和への活力を失つていると答えた。

彼等の自転車ツアーの仲間は七〇人位で、全世界を廻つていそうだ。職業を捨て、働いた金を資金に disarmament を訴えているのである。いったいその無償のバイタリティは何なのか。彼等の信仰は、形だけはクリスチャンもあり、仏教徒も、無宗教者もいる。だが、と彼等は言つた。何か自然の中にいのちのようなものを感じているのだと言つた。

私はその一言ですべてを諒解した。そして驚いた、今度は心底から驚いた。というのは、西欧近代文明は自然を物質とみなす。その上に科学技術文明が成立し得て、今日の世界の繁栄を生み出している。が、逆に、核や公害も生み出しているが。その〈近代〉の基本は、〈自然は死せる物質である〉この自然物質観である。この青い目をした二人の青年は、自然はいのちと言つた、何か見えないものを自然の中に見ているのである。

オーストラリアから来た青年はまたこう言つた。平和は国へ訴えても無効です。人

の心から心へ、だから吾々は自転車ツアーをするのですと。

職も捨て、青春をかけ、言葉の障害を超えて、なお彼等を駆りたてているエネルギーは何か。私にはそのう、ず、きが分る。彼等はいま新しいエネルギーの存在を感じ始めている。それが何であるか、彼等も未だはつきり言えないかもしれない。武力で国の安全を守る、そういう永い伝統を否定して、武力に代る、いや明らかに武力よりも強いエネルギーの存在に、気付き始めている。それを自然の中にへいのち〳〵という形で見はじめている。でなくてどうして、disarmamentを主張して、世界の人から人へ、心でそれを訴えようとするだろうか。

私は、時代が移り変わる転換の徴候を感じた。近代文明の母胎をなす「物質自然観」が、青い目の青年達によつて否定され始めている。それに代つて、へ見えないもの〳〵に実在と物質よりも強力なエネルギーを、見る目が芽生え始めている。彼等は未だ漠然とそれをへいのち〳〵と呼びかけているが、明らかに、へ見えないもの〳〵が見えるものに代つて、自然観の基底となろうとしている。

そういえば、この三月の西独選挙で、緑の党が大挙進出した。緑の党とは、自然との調和を主眼として、ヨーロッパの核廃絶を実現しようというのださうである。ここ

にも新しい自然への目がある。

私は、ルネサンスが、新しい「自然」と新しい「人間」の発見から始まったことを思い出す。自然観と人間観、この世界観の転換が一つの時代の文明を創り出す。爛熟した西欧文明に代つて、いま、一つの時代が胎動しているのではないか。

自然の見えない部分に向つて、〈へいのち〉と呼びかける自然の新しい発見が、それも庶民の間から始まるうとしているのではないか。

嘗て、ルネサンスは芸術から始まった。それも文学、併も詩人達の先導によつて始まった。もし、いま第二ルネサンスが始まるうとしているのなら、詩人達は果たして、既に、その先導の徴を示していたであらうか。

私は、私の乏しい知識の中から、ぴかりと、数人の詩人達の名を思い浮べた。ポードレール、ランボオ、リルケ、そして宮沢賢治。彼等の中に、自然観、つづいて人間観の明白な転換の徴を見るのである。私は、それを論証するだけの力をもたない。だが、直観がそうだと、私に、その発言を求めるのである。

## ボードレール

ボードレールが〈万物照応<sup>コレスポンダンス</sup>〉の第一行に

“自然は神の宮居　いのちの柱……”

と記した時、第二のルネサンスが鳴動し始めたのではなかったか。見える自然の中に、見えない神の宮居を、しかと認めたボードレールの視力は何だったのか。「夙に幼少の頃から神秘に向う性質、神との対話」、いわば霊的詩人、その見えないものを感得する目が、現実の見える世界と、見えないけれど感得される世界との、一種の照応の関係にあることを確信させていたのではないか。ここでは、いわば真実の見える世界は、地上から隔絶したものでなく、照応の関係にある。それが〈自然は神の宮居　いのちの柱〉と言わせている。そこに、自然は物質とみなす近代とは、異質の自然観がほの見える。

ボードレールは「パリは世界の愚劣の中心」と唾棄した。それは「一切が、この世では、罪悪の汗をかいている」と、文明そのものを軽蔑したからである。『悪の華』が

出た十九世紀の半ばすぎは、近代文明は漸やく、爛熟の兆を示し始めていた。ボードレールはこの文明の滅亡を予見した。「世はまさに終らんとしている……我々人類は、自ら生存の根底なりと信じたところから滅亡するだろう。機械の発達が……進歩が、我々の精神的方面全般を極度に萎縮せしめる結果」と。

ボードレールの人類に対する死亡宣告は、とりもなおさず、彼の〈近代〉への死亡宣言である。見えないものを拒否して、見えるものの上だけに創られた〈近代〉は、危い、愚劣な、虚偽の楼閣に見えたのだろう。



だが、このボードレールは、近代を超克することなく、いわば逃避の形で世を終った。衆俗を軽蔑して、ひとり高しとする貴族的ダンディズム、それは自己と他者を峻別する近代的エゴの一形態にすぎない。ボードレールに於いて、自然への新しい目は見られたが、人間観は未だ〈近代〉の殻を被ったままであった。『悪の華』はダンテの『神曲』に比せられる。そうかもしれない。ダンテが未だルネサンス人でなく、ルネサンスの先駆者であつたと同じようである。

ボードレールは救いを希求しながら、救いを忌避した。懺悔によつて安易に救われるキリスト教的救いを拒否した。この矛盾が『悪の華』一巻を生み出させたと云えるのではないか。彼の唾棄するパリの衆俗の中で、酒と女と頹廢に沈淪しながら、なお悪魔に祈りを捧げる、この悪、それはダンテの「地獄篇」に見る苦惱である。何がボードレールをこれほど自らを罪の中へつき墜とさせたのか。

それは、人間のもつ原罪に自らの身を焼かせるためであろう。詩人は、その苦しみに耐えて、書く者。それがボードレールの、〈見えないもの〉神への祈りの形であり、彼の救いとは、死、その外にはあり得なかつたのである。

私は、『悪の華』を、第二ルネサンスの先駆者として評価する。それは、〈見えないもの〉



を自然の中に見た者の、文明への激しい怒りの書であり、もう一つ、古い人間観（原罪説）にとり憑かれたままの苦悩の書であるから。それにボードレールには既述のように、ダンディズムという、近代的エゴの、二重の相の人間観が残ったままなのである。

## 象徴派

ボードレールは象徴派の祖と目される。その遺産「照応」はマラルメとランボオに継承される。前者は芸術派の系、後者は見者の系である。

もともと、霊の人であったボードレールの目に映じた天上の世界は、スエーデンボルクの影響をうけて、地上と鏡のように照応し合う真実の世界と定置され、そこから、人と天上との交感が可能となり、詩人は、其処から、時おり洩れるおぼろな言葉を、象徴の森をよぎって、〈万物照応〉聞き取る者となるのである。

だから「詩人はまことに、火を盗む者」としたランボオは、ボードレールの直系の嫡子である。ランボオが「ボードレールは最初の見者、詩人の王、真の神」と称えたのもむべなるかなである。

マラルメは、天上の世界を「純粹に抽象的な天空」として、実在から觀念に變容させた。従つて、其処から洩れる言葉をもはや聞き取る者ではなく、言葉の鍊金術によつて、無限や永遠を創出する芸術家となつた。「照応」は天と地の照応、神と人との交感ではなく、単に言葉の交響樂、詩の技法へと意味を傾斜した。だから、ヴァレリーは「音樂から詩人の財産を奪い返して」、純粹に音樂だけで、美を暗示的に表現する、裝飾主義に墮ちこんだ。

もはやそこには、天上の火を盗む詩人はいない。主知的に美を創出する〈近代〉の我が坐っている。自然の奥に照応する〈見えぬもの〉を感じる自然觀は姿を消している。かくて、詩は新しい自然と人間を發見する、ルネサンスの役割から離れ、単に芸術のジャンルで美をもてあそぶ矮小なものとなり、時代や文明を先導する活力を失つてしまった。

## ランボオ

見者はすべてオルフィスム、いわば神秘主義の系譜につらなる。これを無視しては、

ランボオの天才も、詩業放棄の秘密も解けない。そうして、いま世界を揺るがしている、第二ルネサンスの胎動を聞くことが出来ない。それは、西欧近代文明がホメロスの合理主義の系譜につらなるからである。

これらすべてを解く一つの言葉が、ランボオの「吾れは、他者」（「見者の手紙」）である。それは、デカルトの「吾れ思う、故に吾れあり」、この近代の自我を否定する大事件である。

「吾れは、他者」とは何か。それはランボオの哲学ではなく、実感である。「吾れ思う、というのは間違いです。僕において人が考えて呉れる、こう言うべきです」ランボオの詩篇がしばしば予言的である事は知られている。例えば『地獄の季節』（悪胤）で、十八年後に、ランボオが金を貯め、病気になる、アフリカから帰って来る姿が、具象的に描かれている。また、詩篇の中で、ランボオはしばしば前生の記憶を伝える。ある時は古代のギリシア人であり、中世の傭兵であり（悪胤）、ある時は印度のバラモン僧の弟子であり、田舎住まいの旦那衆でもある『イリュミナシオン』（生涯）

これらは何か。ランボオは「俺は、墓場の向うから出て来た人間」（生涯）なのか。まさしくそうである。詩篇を書いているのは他者である。だから、ランボオは自分の

書いているものが分らない。書いた後で理解する。「俺は今、自分の思想の開花に立会っている」(「見者の手紙」)。ランボオの見者は、こういうオルフィスムの神人合一の形で開かれる。書いているのはランボオである、詩篇を告げているのは内部の他者である。ポワイヤン(見者)とは、千里眼である。ランボオの天才は、この千里眼による。

こうしたランボオにとり、自己とは、また他者としか言いようがない。「吾れは 他者」とは、哲学でなく、実感である。こうした実感は、後述する宮沢賢治にもみられる。

然し、「吾れは 他者」とは、デカルトの「吾れ思う、故に吾れあり」が、証明を要しない自明の実感であったと同じように、大事件なのである。これは東洋人の実感である。ランボオは、西洋に代る、東洋の人間を発見したのである。

ランボオが、ボードレールの〈照応〉の自然観の上に、東洋の人間観を加えた意味は大きい。この時から、第二のルネサンスが胎動を始めたのである。

ランボオは東洋に憧れる。それは原始への回帰でもある。

『俺は東洋へ、原初の、永遠の英知へと帰って行った』

(『地獄の季節』〈不可能〉)

だが、この回帰は失敗に終る。不可能だからである。なぜか……ただ、瞥見された永劫、遠い未来の希望としてだけ残る。この失望と希望が、ランボオが筆を折った理由であると、リヴィエールは説明する。

また、小林秀雄は、ランボオが写し取った〈他界〉を、人々が認め得なかったので、自からを「架空オペラ」の道化師と観じ、筆を折ったと云う。

そのどちらでもない。ランボオは〈見者〉になり損なったのである。「見者であらねばならぬ、見者にならねばならぬ」詩人は、あらゆる日常的な感官を「思慮深く錯乱させて、見者となる」。これでは、「錯乱」だけでは見者になれない。

見者とは、内部の他者が告げるものを受け取る千里眼ではない。自から見る覚者である。自他同一の〈我〉は、千里眼から覚者になることを要求する。これが〈東洋〉である。ランボオは〈東洋〉になり損ねた。

見者への道は、更に、二十世紀、リルケや宮沢賢治の出現を待たねばならない。

## リルケ

『オルフェウスへのソネット』を書いたリルケは、オルフィスムの徒、霊の詩人であった。降神術を好み、霊の存在を認めた。それは、リルケが特殊だったのではなく、他の人々が特殊だったのである。そうリルケは言っている。世界の世俗化と共に「人間の感官が萎縮してしまったので」と。

そういう霊的詩人にとり、「吾れとは 他者」は自明の実感であった。『ドゥイノの悲歌』をはじめ作品の多くが、恰も内部の他者からの口述のように、口をついて出てくる形で書かれたことは、よく知られている。



それは実感だっただけでなく、現に彼はその他者を見ながら、口述を受けている。あの夜着物を脱いでいたら、突如口をつけて詩句が出た。余り荘重なので「これは私の詩ではない」と叫ぶと、そこへ古風な紳士が出現した。その紳士は詩を朗読した。その中にいま彼の口をつけて出た詩句もあった。朗読後、彼はその詩を写し取ったのである。

そういうボワイヤン(千里眼)であったリルケには、早くから自他一体の予感があった。それは既に二十二才の詩集『降臨祭』の中で、「僕は、悠久なものの断片」と、自然と自己との一体感を述べている。

その自然との一体感が確信となったのは、二回にわたるロシア旅行の結果である。そこには西欧が失った自然があった。それは魂のふる里であった。それは「しばしば人間が風景の中から生まれ、又ときには人間から風景が生まれるように見える」自然であった。

この自他一体の達成が、以後のリルケの詩業の悲願となる。そこには〈東洋〉があった。ランボオが放棄した「原初への回帰」があった。「吾れは他者」、すべての他者・自然との同一化、〈見えないもの〉へ参入して〈見えるもの〉へ変容させる詩業、まさに神

業・創造が残された。

このことを、リルケは千里眼から覚者（真の見者）へ歩みきることによって達成する。「ポエジーから予言者までの道程を踏破できるのは、極めて偉大な者だけである。」リルケは極めて偉大な者、見者となる。

この見者の道に、二人の人物がかかわってくる。一人はロダン、もう一人はデンマーク詩人のヤコブセンである。ヤコブセンはリルケに見者の目を、ロダンは原初回帰の方法を教える。

ロシアでの経験が、リルケの中で神の輪郭をとり始めた頃、リルケが愛読したのが、ヤコブセンの『ニールス・リーネ』。神の追求に、なぜ無神論者の聖書といわれるヤコブセンがかかわってくるのだろうか。それは二人の間に、人間の本質にかかわる共通点があったからである。ヤコブセンの「自分の目でものを見る」が、リルケに於いては、「私が神と申しますのは、誰に教えられたものでもなく、私自身の中に生まれた偉大な確信なのです」となる。この固有の神、固有の生と死、それが前人未踏の野を歩く見者の視力となるのである。『時禱詩集』で固有の神を見つけ終えたリルケは、ヤコブセンの書の余白に書きこむ「おお主よ、おのおのに、おのおのの死をあらしめ給え。」